

記者 「原爆が投下される前は、どんな生活でしたか？」

片岡さん 「長崎市本原町（もとはらまち）の小さな家で、母と2人で暮らしていました。（片岡さんは、8人きょうだいの末っ子だった。父はすでに亡くなり、兄と姉は独立していた。）私は、（魚雷を作る）三菱兵器大橋工場で働いていました。（魚雷の部品の検査をしていた）徴用工ですよ。結婚しても、辞められないような状態だった。わたしも、結婚の話は、あちらこちらから、30件ぐらい持ってこられていました。結婚せんやったのは、母とおるのが一番楽しい、幸せという考えもありました」

記者 「原爆が投下された時は？」

片岡さん 「工場で働いていて、『あー、ちょっと暑いかね』って、3人で外に出て、工場の軒の下に立って話をしておったら、『なんか（飛行機の）爆音のような音がするね』って。でも、『（空襲警報が）解除になっているから、おかしいね』って。3人が軒下におるうちに、私が一歩、こう外を見たんです。そしたら、顔をピタピタ鞭でたたかれるようになって、それから、もう意識を失って、どれくらい転んでいたのか、まったくわかりませんでした。気が付いたときには、誰もそばにおりませんでした。おかしいねと思って、工場の様子を見たら、誰もいない。原爆が落ちたこと、知りません。（3日前に）広島に落ちたのも知りませんでした。がれきの中をね、どういうふうにか、逃げていく途中で、下敷きになった女の人の声だったと思うけども、『助けてくれ』って。しかし。それどころじゃない。逃げていくのも無我夢中で、どんな気持ちで、逃げていったのか？あー、純心（高等女学校）の横を通ったのも、わかりませんから。どこを・・・もう田んぼ道を逃げてきているんですね。そしたら、気が付いた時には、『あー、これは、日本がやられている』って。たくさんの人が、——浦上（うらかみ）の川があるんですよ、——その川の土手のところに、もう息も出来ないぐらいに、積み重なったごとくして、亡くなる人、裸になって走っていく人。そして、私が、足が運ばれんして、びっくりして、これはただごとじゃないと思って見たら、私が、なんか焦げ臭いにおいがするんですよ。おかしいなと思ったら、——モンペでしたからね、規則やったんですから、三菱も——ひざから下の方、両方、燃えとるか破れとるか知らんけども、だらーと、その布が下がってるんですよ。あー、焦げ臭いにおいがするが、どうしてやろかと思ったら、そしたら、肩の袖がないんですよ。熱い。もう焼けてしまって。顔のことは、もう、気が付きませんからね。あーこれは、自分は焼けとるなと思って、その時、初めて、母はどうしておるやろかということが、記憶が出たわけです。もう一刻も早く、母がどうしてるかと思って、もう、足の運びがなかったけど、もう失礼も何もないんですよ。もう、人の足を踏もうと、体を踏もうと。土手から下の川の方へ、切り通しと言うて、水が流れていくところに、ちょっと、人が歩いていくところがあって、そこを行こうと思うけどね、もうたくさんの人が浮かんでいるんですよ。あー、これはどうしたもんじゃろかと思って。わたしもね、そこを乗り越えていたら、今度は、川から上の方に行きますと、家があっちこっち、

燃えているですよ。そこをくぐって、私の母と2人おったところに来たら、もうみんな倒れてしまっているんですよ。燃えるのが、あちこちに。もう道の両脇が、燃えている。

そしてね、あーと思って。どこも、家は倒れてしまって、どうしようかって、思っていたら、母の姿が見えたから、——私たちは、昔は、この辺では、『おっかー』と言いつたんですよ。母と言わずに、『おっかー』てね。——『あー、おっかーが生きていて、よかった』って。『おっかー』って、一声。そしたら、あー、『チヨか?』って。母も下ってくるまでは、わかったんですけど。もう目が見えなくなったんです。そしてですね、母が、『お前は焼けとるよ』って。その時には、もう全身。母どころじゃない。全身が、どうもこうも、もだえるようになって、寝ころぶようになりました。全身でしたからね。顔だけじゃなかったんですよ。そして、もう、こう、かがんだまま、どうすることもできなくておると、なんか、もう、ざわついて、逃げてくるような人もおる。そしたら、なんとなく、こう、攻めてくるような、燃えて火の粉が飛んでくるような感じがしました。あーどうしようかね。目は見えないし。母は、『ここにおったら、もう自分も焼けただれて死んでいくから、なんとか、俺が竹山まで、——ちょっと、竹山が上にあつたから——あそこまで、なんとか、俺が手ば引くからな』って。こんなところの言葉ですよ。『俺が手を引くから、なんとかして、竹山の方まで行こう』と言うて。そして、母に手をあれして、——わたしも、燃えてくる状態がわかるんですよ、火の粉が飛んで——そして、竹山のふもとに行ったら、上の方から、『母ちゃん、母ちゃん』と、子どもたちの声が、もう竹山の根元から聞こえます。あー、人がおってよかったって。私は、もう上の方に行ききらないで、そのまま寝たばかり。そしたらね、子どもたちが、——何時間かたっておったでしょうけど、時間のことはわかりません——『もう、母ちゃん、水をくれ。母ちゃん、水をくれ』と言うけど、やっぱり、その時は、どこで水をくまれるですかね。後でわかるけど、器もないし、そんなして、『かわいそうに、子どもたちが』って思うておったら、自分も、また、今度、のどがかわいて、どうもこうもならんで、『おっかー、水が飲みたい』って言うけど、『水を飲めば、ころって死ぬそうよ』ってね。そして、誰も飲ましておらんけど、子どもたちも誰が死んだ、大人が死んだというて、名前も覚え切れませんがね、そんな話を聞いていました。真っ黒なものがね、竹やぶから垂れて、黒いものが落ちてくると言うて。竹山も葉っぱがあるんですけどね。

そして、そこに、3日3晩、野宿しました。そして、歩ける人は下の方に、車を持ってきてあるから、病院の方に、なんとか、(当時の浦上第1病院、今の) 聖フランシスコ病院の方に行こうと、何人か、やっぱり乗せて連れて行ったんですけど、くわしくは聞いてません。私たちは、もう手がかかるから、2人か3人か残されました。野宿ですね。そして、4日目になるとね、町内の人たちが、『野宿してね、おつても、つまらんから、聖フランシスコ病院まで、なんとかして、加勢をしてもらって、運ぶ

から』と言って、『はい、そうしてください』って。戸を、担架にして、運んでくれて、コンクリのところに、そのまま何にも敷かずに、寝かされました。でもね、コンクリの上だから、どこの上だからと、あれも考えません。うなりが大きいんですよ。枕元には、もう気違いになったような人たちが、『そのこの』と、近くで言うでしょう。そして、あっちの方では、一所懸命お祈りをする。カトリックが多いからね、お祈りをしている、そこで。そんなしてね、あー、ここもうなり声。あれのごたるね、戦場のごたるねっていう気持ちでね。耐えておってでも、わたしは、1滴の薬もなかったそうです。4日目に行った者はね、少しね、チンク油、そんなのが、ちょっとあったそうですけど。あの、外科ではないから、あの、結核病院だったんですよ。だからね、薬がなくて、街から知った人が、秋月先生を知った人が持ってきたけど、その薬を、——何百人の人が寄ったそうですからね——わたしは、いっぺんもね、お薬を付けてもらうこともなく、1回かしらん、『どうかい』て言うて、お医者さんが来てくれたのも知りません。・・・来てくれたそうですけど、もう自分が苦しいためにね、それどころじゃなかったんでしょう。そういうふうにして、コンクリの上に、そのまま生死の境を、耐えてね。後で考えると、どういうふうにしていたか？

そして、目が開いたのが、1か月ばかり後やったですよ。そしたら、母が、『あー、お前は良かった』と、『目が開いて。俺はな、生かされてでも』って。『目が見えないということはね、どうしようか？生きててもね。あー、どうしようかと思った』って。『でも、目がかすかに見える。おっかー、良かった』って。3日ぐらいしたら、はっきり見えるようになったんです。なんか皮膚がね、ただれてしまって、そして、目と目が眠って、ついてしまってるんですよ。そしたらね、1か月あまりしたら、はっきり見えるようになって、『誰が死んだよ。彼が死んだよ』って。その時、初めて、『お前にはな、なんも言わんじゃったけど、それだけ死んだる』。わたしは、全然、悲しくもなかった。その時は、母も、だいぶ疲れておるはずですね。わたしを看病したんですから。食べ物も何もなかんのに、あっち行き、こっち行きして。私の命の恩人は、米の汁。あれを、お茶代わりにして、お茶とおもゆの汁が、命の素やったんですよ。そんなして、口はこう、ひついてしまって。そして、ストローというの、ありますけど、麦わらのね、あるんですよ、田舎はね。そんなとこ取ってきて、お茶と重湯は、私の命の綱だったんです。その時、母を見たらね、あー母も、本当、相当苦しんで、私の介抱もして。あー、子どもたち、姉たちも死んでしまって、これだけの命を取られてしまって、母もやつれておるなって。そのころ、母も、髪もとれる、何か抜けてくると。そして、下痢が続いて、どうもこもならないって。便所もないし、とにかく困ってしまうと言うくらいで。寝たり起きたりした時代だったんです。

そして、目が開いて、私も、動くことも出来ません。起きることもできません。自分で出来ませんでした。母は、69歳だったからね。寝込んでしまっただけでおらんけど、母も、腰が曲がってしまって。食べ物がないでしょう。百姓をしてなかったから。母

は、山を越えて、三川町（みかわまち）に、『にんじんやごぼうを売ってくれ』って言って。そして、スープにして、それを飲ませたり何かしてね、もう、本当、母が命を救ってくれました。

そんなして、『おっかー、どんげしてるね、顔は？傷のよけいあるね？』って言ったら、『いいや、顔の傷が一番少なか』と。『おっかー、手を見れば、ただれてしまうて』って。この手を、母が破れた布でまいとるんですよ。そして、こうなってしまうて（指がくっついて）、これは今も開きませんからね。母が、知らずに巻いてしまっている、汗が出るから。後のことですけど、それはね。起きることも寝ることもできない。どんななあってね、おるやろか？そして、幸いなことに、1枚の畳がコンクリの上にあります。古畳のね。そして、そっちの人たちが帰った後に、1枚の畳が、わたしたちの寝床やったんですよ。そして、『おっかー、顔は、どうなってる？』『顔はね、もう少ししかね、心配せんでもよかけん』って。わたしは、『おっかーね、手は隠されるね。顔が少しで良かった』って、喜んで。そして、『うちの方がどうなっているか』と、初めて聞いて、『うちのあたりも、全部ね、焼けてしまつて。半分、倒れた後に、また燃えてきて、家もなかない』って。そんな言うて聞かして、『あー、良かった。おっかー。顔が少しで良かったなら、良かった。手は、人の前にはね、隠される。足もね、隠される。足も歩けるけんね。あー良かった』と、思って、『おっかー、1回』、——そのころは、いづらか座るようになっていたんです。——『あー、家の方も見たかね。家もどうなってるか？外に出てみようか』。外によちよち初めて出て、フランシスコ病院の高台の、——少し高台になっていますからね、——そこから、このあたりが見えた時には、慟哭しました。『あー、本当、どうなるものやろか。こうして1軒もないように』。崖に、こう木を立てたりなんかして、こうして住んどるところも、まだあるしね、家は建ってないんですから。あー食べ物もないし、この浦上と言うところは、どうなった？もう誰もいないからね。20分ぐらい、慟哭しましたよ。悲しゅうして。『あー、姉たちは死んどつて、良かった』。もう生存競争。誰1人、『何でも持って行って食べんか』と言う人おりません。もちろんないんですから。元気な人は遠くに買いに行くんですよ。母は、山をひと超え、三原（みはら）をこう行って、行かないと畑もないから。

そんなしとる時に、何とか歩いてみせるぞと。こんなばかりしてもならんから、多少、外に出た時、教会（浦上天主堂）の方を見たら、もうドームが、上のね。神様がおられるだろうか？初めて、その時は、——わたしはカトリックです。カトリックのくずですけどね。——神様がおられるやろか？教会も、戦争で、こんななってしまうて。あー、その時、神様、おられるんだから、おられたら、教会ぐらゐまで壊さんでもいいのにな。わたしの一心からのあれでね、20分ぐらい立っておったけど。いやいや、こんな・・・つまらない。また、家の中に、自分がコンクリのところ

行ってね。そんな苦しみも乗り越えて、よう生きてこられたなと思って。食べ物もないですから、母あればこそ、生かされたって。もう、母のことは、忘れませんけどね。

そうして、自分の家のあたりを、ちょっと見に行こうかと思って、あー、顔は少しだからと、手ぬぐい被って。山が一盛り、木があったんです。そこのところに来ると、この辺りが見えないんですよ。そして、そこの上の方まで来たときに、おばちゃん came ねと思って。おばちゃんは、よそのおばちゃんですよ。知らんのですよ、私がおるということは。そして、近寄って行こうかと思って、こうしたら、そのおばさんが、何も知らんふりして行きなされるから、『おばさん。私よ』って言うたら、こうして見たら、『あー、姉ちゃんだったか』と言って、『そんな顔になって、どうしようか』と言って、おばちゃんが泣くんですよ。私は、母から、『少しだから良かった』と言って、やっぱり、安心しておったのに、これは、この他人さえも、私の顔を見て泣いてくださる。母は、これ、うそぞと思ったんです。しかし、自分の家にもどって、母を責めるわけにもいかないと。自分は、いま聞いて、悲しいけど、母は、原爆の日から、我が子の傷ついたことを全部見てね、どれほど苦しかっただろうかと思ったら、『うそを言うたね』って、言い切らんやっただですよ。涙の出た。母のことを思えば、やっぱりね。そしてですね、母を責めることができなかった。『おっかーは、うそを言うって』って。でも、どうしていこうかと思って、どれくらい考えておりましたか？あー、鏡があれば、顔を見たいと思うけど、鏡も、母が持っておったか、持っておらんか、あれば隠したり、そう思うんですね。見てないんですよ。

そしてね、足の練習をしようかと思って。運動場があったんです。フランシスコ病院、前は、少し、今までよりか、余計歩けるようになったなって言う時にですね。なんか、破片のガラスやろかって近寄ったら、わたしが見えて、『これは、鏡の破片のごたるね』って、思って。けど、そう思ったら、体が震えました。自分がその鏡を取って見たら、どうしようかと思ってね。そして、こうして体が震えながらも、左手で、右手はもう使われんのですからね、こうして見たら、もう、投げつけました。鏡を持って見た瞬間ね。あー、母も苦しかっただろう。我が子が、これだけ傷ついて。そしたら、もう死にたい、死にたいですよ。生きていけるものか、この顔で。そして、何遍か、死にたい、死にたいという、自分1人で悲しんだが、母が買い物に、食べ物を買いに行った時には、声を張り上げてまで泣かんけど、しくしく泣いて。母が帰ってくる時には、涙をふいて、母に苦しみを与えてはならんという考えからですね。何遍か、わたしもね、『生きられない。この顔では』って思って。自分1人でおったけど、何となく頭に支えがきました。あー、神の教えやろか？あー、自分はカトリックであるということを考えました。死ぬということは、神に一番背くことですよ。こんなことを思ってよかやろか？命を自分が絶つということは、一番大罪やろかということ、自分が知りながら。そしたら、少し、この苦しみを、死ぬほどの苦しみを、これを抑えて、13人の死んだ肉親のお祈りをささげようって、自分の苦しみを、お祈りの代わ

りにささげようと。それが、少しずつ、助け船ですね。

でも、それだけでは、人の前に出ることができませんでした。あー、この顔でね、私も、神様が、人並みの顔を作ってくくださったのに、この顔になって本当にねって、なさけないっていう考え方が。私もまだ元気じゃなかったからね、浦上の教会にも行くことができないで。教会は、おミサと言います、日曜日にね。シスターにお願いして、『私は、まだ行けませんと。だから、一緒に（病院の）礼拝堂にね、おらしてください』と。そういうふうにしてね、母にやっかいになって、過ごしていきました。

そしたら、その間に、わたしは、結核が出たんです。『あんたはね、そんな、重病じゃないから、半年ばかりでいいですよ』って、おっしゃったけど、やっぱし、ぶらりぶらり6年かかりました。全然、働くということできなかったんです。6年間働かずにあって、あー、母は、本当に、わたしを助けてくれたねって。何とかどこかに仕事を探さないと、これは、今のようにぶらぶらしておったって。（長崎大学付属）病院の方に、門番さんがあって、親しくしておりました。『ツヨさん、あんたもね、生活していかなと、おっかーもね、年も75歳になってね、お金もなかなぞー』って。

『だから、少しでもやさしいところに勤めたらどうか、俺が病院の世話ばするけん』て言うて。『お願いしますよ』と。わたしに、婦長さんを教えるんですよ。『行かせてもらいます。ありがとう』と。行っただけです。そしたら、その人が、私の顔をね、『あなただったんですか？』て。『原爆にあわれて』と。私より、むこうが、悲しかったです。婦長さんは、『今ね、いいところがない』と。『結核病棟しかないんですよ』と、おっしゃるんです。わたしも、『結核病棟はね』って。今少し直ったばかりに、また結核病棟に勤めたって。『何の仕事ですか？』、『掃除の仕事』とおっしゃるんです。掃除の仕事といえば、どれくらいか、わからんね。また、立往生して、『何時から何時までですか？』、『掃除は、8時半から5時までです』と。『そうですか？もう少し、やさしい仕事はないでしょうかね』って、——私が弱いと言えば、もう雇わんからね——『ないでしょうかね？』と言ったら、『補助婦というのが、あります』と。『補助婦はどんなお仕事ですか？』、『病人の世話ばする人ですよ』と、おっしゃったから。『あーそうですか？時間は何時から何時までですか？』と言ったら、『この人たちは、もう7時から病人の食事を、調理所から運んだり、そして、患者さんたちに持ってきたりしてね』。『帰りは？』と言ったら、『帰りは、後を片付けたり何かしたら、もう7時ごろになります』と、おっしゃるんですよ。『あー、そしたら、これは、時間が合わないね』って。母は、だんだん年をとって、何も出来ない立場になっていく。母をほったらかして、7時まで、ご飯を食べさせないようにして、朝は、もう7時から出て行ってと、思うぐらいの考えから、『掃除は1人でするんです？』、『いや、よけいおりますけど』と、おっしゃるんです。『よけいおるけど、あなたが勤めるところは、結核病棟しか残っていません』と、おっしゃるんです。結核病棟はねって、一応考えましたけど、でも、並の仕事は、今の状態では、

できないしって思って、『よろしゅうございましたら、私を使ってくださいませんか』と言ったら、『あなたが結核病棟でも、よかったら、あしたから来てください』。あしたからは、着ていく着物、エプロンは着ているけど、中に通勤する洋服はなかとに、どうしようかと思いました。でも、エプロンを破けたのを着て、通院をしばらくするようになったんです。

後でね、わたしは、『この手で何も出来ません』と言ったら、雇わんはずだったのに、身体検査もなし、何の話もふかふかとなさらんしてと、後では、考えましたけどね。そしたら、他の人たちは、傷を受けた人は1人おりました。髪を下げて、来りましたよ。私より5つ6つ若い人がね。『あなたも、原爆でやられて』って言った。やっぱり2人は話ができるから。もう他の人は、浦上の人もおるけど、傷を受けない人と、また、違うんですよ。だからね、『あんたも無理しなさんなよ』って言うと、『片岡さん、あなたも私も、本当、こんな被害を受けて』て言うて。やっぱり、会ってね、時々、話をしておりました。だから、原爆を受けてない人たちは、ばりばり仕事をするでしょう。私は、この手でしょう。ぞうきん棒と言って、ほこほこするでしょう。病院はね、コンクリの上を、ほこほこ。まだ、板張りがしてなかったから。ここ（右手の上）に、ただね、こうして載せて、こっち（左手）、力を入れて、こっち（棒の先）が落ちらんようにする。そして、ぞうきん棒で、ぞうきんの布でね、拭くときには、あー、この手がなかったらと思ったです。できないんですよ。絞ることも。そんなつらい目もおうて」

記者 「片岡さんは、原爆乙女の会（後に被爆者団体の設立につながった被爆した若い女性の集まり）に入ったんですね。誰かに誘われたんですか？」

片岡さん 「何人か知っておったから、行っただけ。私はね、バスにね乗って。（原爆乙女の会が開かれた）渡辺千恵子（わたなべ・ちえこ）さんの家は、歩いて行かれんから。バス賃がないようになって、何か月か行って、やめてしまったんです」

記者 「核兵器廃絶を訴えるようになったきっかけは？」

片岡さん 「働くようになってでも、あっち隠れて休み、こっち隠れて休み、また、結核が出たんですよ。その時は、長くかかりました。半年以上ですね。半年以上、7か月ぐらい。そしてね、そういうふうにして、何年かたって、東京から、——その頃は、体も、いづらか良くなっておりました——岩倉さん（岩倉務〈いわくら・つとむ〉・アメリカの公文書館にあった被爆後の広島と長崎の記録フィルムを、市民の手で買い取る「10フィート運動」の事務局長）が、おいでで、こうこうと言って、平和を求めるために被爆者の人たちがね、運動をしてくれないかという相談がありました。（「10フィート運動」で買い取ったフィルムに、顔にケロイドがある片岡さんを撮影したものがあった。）『あーそうですか？私は、人の前に立つこともできん。顔がね、人にさらすのは、できないんですけど』と言った。やっぱり、ちょっと粘りましたよ。すぐ、『はい』とは、できませんでした。仕事に行きおる道中は、子どもたちが知らんから、

もう、私が行きよれば、『見ろ。見ろ』って、あーどうかこうか言うて。また、知った人が来れば、隠れおったんです。よその家に隠れて、そんなして行きよる中でしてね、だから、『運動というものは、人の前に立って、運動せんばならんでしょう』と言ったら、『自分の話をせんばいかんですよ』。『そうですか』

記者 「昭和56年（1981年）に、ローマ法王が来日したことも、大きな影響があったということですね」

片岡さん 「『ローマ法王様が、（広島と長崎に）おいでる』って。『原爆のことについてね、話す』って。その時は、テレビも何もなかったんです。私は、半信半疑やった。教会の信者さんの熱心な人たちは、『（原爆投下は）神の摂理』。永井先生、真っ先にね。『神の摂理。神の摂理』って言ってね、『耐えなさい』という神父様の説教でも、そのことを聞いておりましたけど。あー、本当ね、神様に背くようなことをしてはならない。神様のはからいだったのでしょか？あの教会も壊されて、本当ねと、思いながらも、私も、ずっと、難儀。私は、熱心じゃなかったでしょうけどね、（信仰を）捨てておりません。私はね、その教会の壊されたということに、神様を疑いましたけど、元には帰っておるんです。それまでは、私は、半信半疑で、おったんです。あー良かった。ローマ法王様が、本当のことをアピールなさるでしょうって、思っ。そして、（広島での演説を見るために）その頃、一番小さいテレビを買った。絶対に私は聞きたいと。これが、神の摂理だけだったかということね。私も半信半疑やったですから、これだけ傷を受けてね、『神の摂理。神の摂理』とばかり言われると、つらかったんですよ。摂理となれば、償いですよ、これは。あー、本当に神様に背いたものだけが、こんな傷を受けるんだらうかって思っ、悲しくてたまらないなかにね、会えるということはいれしかった。真っ先に、わたしはね、仕事は、『具合が悪いから』と休んだ。耳をあてて聞きました。真っ先に、『戦争は、人間の仕業』って、おっしゃるんです。そうだったかって。それから、私は心がいくらかすーとなったんです。うれしくて」

記者 「その後、片岡さんは、「10フィート運動」のフィルムを元に作られた記録映画を持って、ローマ法王に会いに行くことになるんですね」

片岡さん 「岩倉さんから、『ローマ法王様の方に、いつのいつかに行ってください』って言われて、『あら、そうですか』て言うて、電話でお受けしたものの、もうがたがた震えて、もう一晩は眠りきらんやった。どんな話を、原爆のことだけで、自分の話だけ話せばよいのだろうか？また、ほかに、あらせんやろか？自分のようなものが、どうして、パパさまと、本当、近づきができるやろかという、その心配の中で、もう、がたがた、一晩寝ることができなかつた。行ってみて、9万の人の前で、その時は、ちょうど、パパ様のお祝いのために寄るそうですよ、祝福をもらうために。11か国から9万の人が集まった。大司教と言うて、赤い洋服を着た人たちが、ぐりーて、私たちを囲んでね。一番前に。パパ様から、祝福をしてもらったんです。原爆の苦しみから喜



びとなった・・・。法王様が、訴えてくださったんですよ。原爆がどんなにおそろしいか。その後、・・・今度はわからんごとなったんです。パパ様が何をおっしゃってくださったか。最後に、ただね、『がんばってください』って。『がんばってください。あの何か、お体を大事に、がんばってください』。そこだけ、わかった。

そして、まわったんです、近いところからね。そしたら、一番最後に、田舎の方に行ってみたら、『核廃絶と言う言葉を書くと政治的に恐ろしいだよ』って、言われました。『あら、そうだったんですか。でもね、恐ろしいんですよ。私の顔を見てください』ってと言って、まわりました。なんの来た甲斐があったんだろうか？核廃絶の話をお話せば、『恐ろしいぞ』と言われて、本当に、生きた甲斐もないような感じで、自分の家にまた戻ってきました。

その後です。『私も平和のためにさせてもらいたい』って。『何にも良いことはできないけど、人の前に立つのもつらいけど』と言って。最初は、もう、がたがた。人の前に、人に見られることさえ、つらいのに。立って話をするという事は、がたがた、足となんと震えて、何か月かたってから、少しずつ良くなって。そして、6年ぐらいたったら、顔のことば、忘れておりましたよ。おかしいですね。人の前で、みんな慣れてしまって。生徒さんたちに、ちゃんと手も見せて、顔はちゃんと見えるから、足も全部ですよ、と言って話しておりました。それから、運動を11年させてもらいました。そしたら、胃ガンで手術をするようになって、ポッキリ切れてしまって、体がめちゃくちゃになってしまって」

記者 「戦争中は、兵器工場で働いていたでしょう。戦争については、どう思っていましたか？」

片岡さん 「戦争をしては、つまらんねという考えがあったとかなかったとか、それもわからん。一生懸命、陛下のことばかり。陛下が、戦争をやめたって、あん時には、私は泣きましたよ。ね、自分はまだ死ぬか生きるかしていて、戦争やまって。陛下はいかにしておられるやろか。陛下の立場どうやろかと。そればかり泣きました。その時は、自分のことより。もう朝も晩も、工場では、最敬礼ばかりでしょうが。だから、神の次は、平和じゃない。天皇陛下やったと、私たち。いつも、最敬礼ばかり。だから、今のように、自分が傷ついて、初めて、平和、平和と言うけど」

記者 「今も、原爆・核兵器はなくなっていないですね。どう思っていますか？」

片岡さん 「あー、誰一人、誰一人、この原爆というものに遭わせてはいけないと、考えています。ね、だから、お祈りをするんですよ。平和であらせてください。私たちは、カトリックの方ですからね。(お祈りを)しない日は、あんまりありません。お祈りをせん時にはね、シャロームをね、心にこうして持って、もう尽くしております」

インタビュー・再構成 畠山博幸

2008年1月30日